

(大阪府)
みよし塾

代表
三好 知信さん

研究者になるつもりでやってきた。塾のことはもちろん、ビジネスのことさえよく分からない。きつと「甘い」と言われるだろう。それでも、挑戦したいのだ。50歳、塾の世界で「自分」を再スタートさせる。

疾風の如く

vol.136

塾そのものがライフワーク

塾を開業しようという人のほとんどは、自分なりに理想とする塾の形を初めから持っている。それを実現したいからこそ独立する。しかし一方で、「塾を開業したことで、目標に目覚めた」というケースもあるからおもしろい。大阪の『みよし塾』代表・三好知信(50)がそつだ。「みよし塾がライ

フワークのような、自分自身のようにながしているんです」と語り、50歳からの再スタートに胸を躍らせる。「再スタート」というだけあって、そこにたどり着くには紆余曲折も当然あった。血気盛んな若者が、勢いそのままに独立開業するのはまた違つ、円熟のドラマがある。その物語を紐解いてみよう。

狂った歯車が導いた先にあったもの

三好はもともと、研究者を目指していた。筑波大の修士論文は、タイの「森林破壊と農民運動」について。大阪市立大の後期博士課程へ進んだ後も、タイにおいてフィールドワーク、資料収集そして博士論文作成に明け暮れた。この時点では、塾にはまったく興味はない。「早く論文を書き上げ、研究者として大学

で研究を続けることができればと思っていました。でも、少し過信とつか、背伸びをしていたのかもしれない。論文が思ったように書けなくて……。歯車が狂い始めたのはここからだ。ただ刻々と過ぎていく時間。いつまでたっても完成しない論文。そうするうち、ついに奨学金まで途切れ



てしまい、嫌でも働かねばならなくなつた。

そこで始めたのが、高校生に英語を教えることだつた。ここが教育との出会いだつたが、これを生涯の仕事とする発想はなかつた。あくまで生活と研究の糧を得るためではない。いわゆる「ライスワーク」だ。どこにか大学院での研究を続けられる程度には収入を得られたが、一度狂つた歯車はなかなか矯正できない。やがてその会社も倒産してしまつた。

次に始めたのは、運送業などの肉体労働。それ自体は苦ではなかつたが、怪我をして続けられなくなつた。いよいよ完全に収入が絶たれ、この頃から、心を病み始める。思いつめた足取りでハローワークへ通い、そこでようやく大手個別指導塾の教室長の職を得た。

このときすでに40代の足音も聞こえ始めていたが、三好は苦笑を交え「それでも、『これでまた研究ができる』と思っていたんですね」と回想する。地に足がついていないわけではない。それだけ、研究が本当に好きだつたのだ。

だが、塾の仕事はそんな三好を変えた。純粋に、楽しかつたのだ。後

いま、ようやく出会えた何かを成し遂げる楽しさにもう一度、夢見ること

る髪を引かれながらもついに研究の道を諦め、塾の世界で独立を目指し始めた……。矢先に、今度は脳梗塞で倒れることに。幸い回復はしたものの

50歳、塾とともに始める人生

苦勞の末、どうか『みよし塾』を開いた三好。個人塾経営者のネットワークに入り、チラシやホームページの作り方、そして映像授業の使い方など実に多くの人に教えを請うた。ここで塾の世界の奥深さを知ることになり、「どんな塾を作りたいのか」というビジョンを考え切れていなかったことを痛感させられた。当然、生徒募集も苦戦したし、現在も試行錯誤の連続だ。

の、とにかく、「なぜここまで」と思っほど、次々に試練が襲つた。しかし、狂った歯車は最後に素敵なプレゼントを用意してくれていた。三好知信、50歳。今が、人生のスタートだ。(敬称略)

それでも三好は言う。「今、塾がとても楽しいんです。何をもちつて『いい塾』と言えるのかもまだ分かりませんが、何かを成し遂げたいという思いは間違いなくある。私ももう50歳、『もう一度、人生に挑戦したい』なんて言えば、甘いと言われるかもしれません。でも、『みよし塾』と共に、私自身も成長したい。『みよし塾』の中に、私自身を見て

三好 知信 TOMONOBU MIYOSHI



1969年生まれ、福岡県出身。筑波大学で林政学の修士まで学んだのち、大阪市立大学の後期博士課程へ。研究者を志すが断念、生活費を稼ぐつもりで始めた塾の仕事で、教育に興味を抱く。その後のメンタル不調や大病を乗り越え、自らの塾「みよし塾」を開業。経験不足も跳ね返し、50歳にして「ここからもう一度スタートだ」と意気込む。

●WEBサイト <https://miyoshi1969.com/>

文/松見敬彦(トリガーワークス)